

ジェンドリンの初期体験過程理論 に関する文献研究(下)

－心理療法研究におけるディルタイ哲学からの影響－

田中 秀男*

今号の論文は、「ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究(上)」(田中, 2004)に続く、(下)の部分である¹。

(上)においては、第2部「体験過程理論の成立とディルタイ哲学からの影響」の途中までを述べた。具体的には、ジェンドリンがディルタイ哲学の考え方をもとに実証研究の仮説を提唱し、みずから実証研究をおこなって成果を挙げたところまでを解説した。

今号の(下)においては、実証研究の結果をもとにして、ジェンドリンが、「心理療法の学派の違いに関わらず、共通して起こっていること」について理論化していく道筋をたどる。そして、理論化に当たってもディルタイ哲学の考え方の枠組みが大胆に取り入れられていることを具体的に指摘する。

ジェンドリンの初期体験過程理論をディルタイ哲学と比較検討することによって、以下のような点が明確になると筆者は考える。

- ジェンドリンがパーソナリティの「変化」を理論化することに成功したのは、ディルタイ哲学から「創造性」を読み取っていたことと深く関わりがある。

*たなか・ひでお / 明治大学元委託職員

¹(上)において筆者は、第3部として体験過程理論に関する文献リストを予告していた。だが、紙面の都合上、やむをえず割愛させていただいた。これについては、別の機会に改めてまとめさせていただきたい。

- ジェンドリンは、どんなパーソナリティの変化も可能だとは決して言っていない。パーソナリティが過去との連続的な側面をもつことも同時に見据えながら考察をおこなっている。こうした複眼的な思考法も、ディルタイ哲学と照らし合わせることによって、よりはっきりと浮かび上がってくる。

2.5 論文：関係の過程概念 (1957年)

2.5.1 概要と経緯

この論文は、ジェンドリンが単著としては初めてディスカッションペーパーに寄稿したもの (Gendlin, 1957) である。この論文の中には「クライアントが治療関係を話題にのせていないときでさえも、なぜ治療関係が大切なのか」という標題の節が含まれている (Gendlin, 1957, pp.7-9)。そういう意味では、前年の学会発表 (田中, 2004, pp.75-78) を引き継いでいるといえる。ただし、今回は実証研究ではなくて、より理論的・哲学的な側面からアプローチしたものである。

2.5.2 この論文の特徴

理論的・哲学的な考察をおこなった論文であるため、前年の実証研究よりも、ディルタイとのつながりがよりはっきり見えるといえよう。以下では、この論文の中からディルタイ哲学と関わりがある項目を3つ挙げ、解説をほどこしてみたい。

表現は創造的である ジェンドリンはのちに、「ディルタイ哲学によって、創造性が私のテーマとなった」と回想している (Gendlin, 1989, p.405)。そこで、ディルタイが実際に「創造」という言葉を使っている箇所を見よう。

手の届きそうもないような深さから、意識的生の領域は、一つの鳥のように生じてくる。また表現もこのような深さからもたらされる。表現は創造的である。こうして、表現を理解することによって、生そのものが我々の手の届くものとなるのだ。(Dilthey, 1927, p.220)

また、デイルタイは「表現があらわすのは、意識が照らし出さないような深みからである」(Dilthey, 1927, p.206)とも述べている。

上記のデイルタイの文章に対応すると思われることを、ジェンドリンはこの論文の中で述べている。

感情は、象徴化したり、表現したりすることによって、気づき (awareness) の領域に生じてくる。クライアントは、自分が感じているものをきちんと描写することによって、隠れていた感情がさらにうごめいてくるのがわかる。また、描写することで感情が活気づいてくる。感情をびたりと言い当て、自分の言ったことを相手から伝え返してもらえば、感情はより直接的 (immediate) になり、強くなるのである。(Gendlin, 1957, pp.5-6)

前年の実証研究において、成功と相関関係があったものに「表現の直接性」があった。体験過程からの表現が直接的であることと、表現にともなって体験過程がますます直接的になることを、今回はより理論的な側面から言い直したといえる。

なお、意識が照らし出さないような深みから表現が生じるということに関しては、翌年の博士論文で引き続きこう述べている。

クライアントは、感情を知的な内容で表現することもあれば、沈黙や身振りや独特の声の調子によって表現することもある。たいていの場合、こうした感情は、「意識的な」ものではないが、かといって無意識的なものというわけでもない。感情はある種の潜在的な状態にあり、何らかの注意を向けることによって初めて意識的なものとなるのである。(Gendlin, 1958, p.51)

このようにジェンドリンは、デイルタイのいう「意識が照らし出さないような深み」に当たるものに対して、「ある種の潜在的な状態」と慎重な呼び方をしている。これにより、「無意識」という手垢にまみれた言葉使いを避けたのである。

体験は引っ張っていかれる この論文の中で、ジェンドリンは、体験の進み方は予想できないことについて述べている。

クライアントは、セラピーの時間が予め思い描いていたとおりに進まないことに気づく。こう切り出そうかと予め思っていた話でさえも、まさにそう言おうとしたとたんに、もう驚くほど違った話になっていることが多い。(Gendlin, 1957, pp.5-6)

一方、ディルタイも、表現によって体験が前へ進むとき、進み方は予想ができないと述べている。

この過程は...いかなる意志の力にも操られていない。事態そのものが次から次に脈絡の更なる成分の方へと引っ張っていかれ、その結果、事態をつかみ尽くすことによって満足感が生まれてくるというだけなのである。(Dilthey, 1927, p.29)

ここでディルタイが、体験が思い描いたとおりに進まないことを「引っ張っていかれること (Fortgezogenwerden / being pulled along)」という言葉で言い表しているところは興味深い。実は、この同じ言葉を、ジェンドリンが似たような文脈の中で使っている。のちの論文「人格変化の一理論」の「自己駆進的感情過程 (The self-propelled feeling process)」という節を見てみよう。

フォーカシングに取り組んでいると、注意の向け先に動きが出る。するとクライアントは、ふと、自分が選んでも思い描いてもしなかった方へと引っ張っていかれている (he finds himself pulled along) のに気づく。グイと引き付けるような大きな力が生じてくるのは、まさにそのとき感じている、ただじっと注意を向けた先からなのである。(Gendlin, 1964, p.123)

体験が引っ張っていかれる具体例を、現在のフォーカシング教示書から引いてみよう。

あなたが内側にある感じと一緒に居る時、その観点に立ってそれがどのように感じているか感知するようにしてみましょう。その感じ方とあなたの感じ方は異なります。ある人が驚いて報告しました。「なんて不思議なんだろう！私は悲しいと感じてないのにそれが悲しみを感じているなんて！」(ワイザー・コーネル, 1996a, p.129)

「ある人」は、体験から「悲しみ」という表現が出てくるなどとは予め思いもしていなかった。まさに体験は、自分の意図や予想を越えて「引っ張っていかれた」のである。

体験の表現には、不誠実や誠実といった判断なら当てはまる ディルタイは「表現には、真か偽かという判断は当てはまらないが、不誠実や誠実といった判断なら当てはまる」(Dilthey, 1927, p.206) と述べている。

真か偽かの判断の方が当てはまるのは、むしろ「(狭義の)概念・判断」といった「論理的規範にかなっている」ものであろう(田中, 2004, p.67)。概念や判断では、理解が目指すのは現われ出た「思考内容」だけである。

一方、「体験の表現」の場合、表現が誠実か不誠実かは、現われ出た思考内容だけでなく、精神的なものにまでさかのぼって理解する必要がある。もし表現が不誠実ならば、「表現と表現される精神的なものとの結び付きは断ち切られてしまうのだ」(Dilthey, 1927, p.206)とディルタイはいう。

こうした発想は、ジェンドリンの論文の中にも見受けられる。(なおここでは、体験を表現することが、「象徴化」と呼ばれている。)

象徴化がふさわしくない時には感情がとどこおってしまう。なかなかセラピストに対しては表現できないとの思いから、感情がとどこおってしまうことは良くあることである。(Gendlin, 1957, p.6)

もう少し具体的に考察するために、弘中(1996)から心理療法の例を引いてみよう。箱庭を作りに来たある婦人の話である。

箱庭を作るプロセスにおいて、この婦人にはゴジラを置こうか置くまいかの逡巡があった。彼女は大人であったため、自分の気持のままに箱庭を作る自由さにかけていたのである。『ゴジラなどを置いたら、変に見られぬいか』という怖れがあった。クライアントの気持の中では、平和な牧場シーンで終わらせようかという妥協への誘惑も強く動いていたのである。しかし、箱庭の制作においては、自分の気持に忠実でないことは他ならぬ製作者自身に痛いほどよくわかるものなのである。彼女はついに意を決してゴジラを置いた。そうしないと、どうしても自分の気持が納まらなかったのである。(p.23)

「なかなかセラピストに対しては表現できない」思いがあったので「平和な牧場シーン」で終わらせたいという誘惑があった。だが、もしそうしていたら、「表現と表現された精神的なものとの結び付きは断ち切られてしまう」ことになり、「感情はとどこおって」しまっていたことであろう。むしろ「自分の気持のままに」ゴジラを置く方が、より「誠実な」表現だったといえる。

2.5.3 のちの著作との関係

ディルタイの論述のうち、「意識が照らし出さないような深みから表現が生じてくる」というところだけを取り出してみると、心理療法の世界では取り立てて目新しい考えではない。ディルタイの考えを、「治療によって意識にのぼったものは、前々から“そのままのかたちで”無意識の領域にあった」という考え方に引き寄せて考えることもできる。ところでこうした考え方は、のちにジェンドリンが、「抑圧パラダイム」「内容パラダイム」と名づけて批判した当のものである (Gendlin, 1964, pp.102-5)。

だが、既にこの時点においても、ジェンドリンはディルタイ哲学をそのような考え方として受け取ってはいなかった。この論文には「どのようなセラピーの条件がそろえば、否定されていた感情に気づくようになるのか」という節があるので見てみよう。

無意識や抑圧についてフロイト派の人々が考えをめぐらすとき、感情は人の中に何かモノのようにしてあるのだ、と考えるのがお約束となっている。...こうした感情が意識に現われ出るとき、感情は、気づくのを否定されていた頃とそっくり同じモノであり、違うのは、今では本人がこうした感情に気づいていることだけだ、と考えることになっている。

では、むしろ感情をプロセスと見なすことにしたらどうだろう。そうすれば、感情を、抑圧の影に隠れていたものだとか、意識の光のもとに照らし出されてきたものだとか考える必要はなくなる。代わりに、感情は、よどみなく進んでいる (in process) か、あるいは、とどこおっていてただ感じにくくなっているだけだとか見なせばよいことになるだろう。(Gendlin, 1957, p.4)

2.6 博士論文：象徴作用における体験過程の機能 (1958年)

2.6.1 概要・先行研究・経緯

概要 修士論文の解説で確認したように、ディルタイにおける「体験の表現」は、「(狭義の)概念や判断」とは性格も理解の仕方も異なる (田中, 2004, p.66)。そこでジェンドリンは、表現の出どころである体験過程に対して概念的な秩序を押し着せることはできないと考える。にもかかわらず、体験過程は無秩序ではなく、前概念的とでも呼べるような独特な秩序

をもつと考える。前概念的なものに概念的な秩序を押し着せることなく、「なぜ体験(過程)を表現すること(=象徴化すること)が創造的なのか」を理論的に解明すること。これが博士論文のモチーフである。

先行研究 博士論文を書くに当たってジェンドリンが参照した文献は桁違いな量にのぼる。

哲学・思想関係の文献に関しては、主なものだけでも、プラトンやアリストテレス、ヴィーコ、デューイ、I.A.リチャーズ、S.ランガー、フッサールやサルトルやメルロ＝ポンティといった思想家の文献が引用されている。このように、ジェンドリンはさまざまな時代や学派の哲学・思想を貪欲に吸収した上で博士論文を書き上げた。よって、ディルタイ哲学からの影響がジェンドリンの思想形成の上で中心的な役割を果たしたとは言っても、あくまで影響の一部分なのだという事実を見過ごしてはならないだろう。

一方、心理療法の文献に関して言えば、'56年の実証研究に続き、再びフィードラーの研究(Fiedler, 1949)が取り上げられている。

経緯 ジェンドリンが博士論文を提出したのは、1958年6月のことである。

提出先は修士論文のときと変わらず、あくまでシカゴ大学人文学部門の「哲学部」であった。提出先だけを見ても、やはりジェンドリンはロジャーズの弟子たちの中で異色の存在だったことがわかる²。

この博士論文は、ウィスコンシンでの統合失調症治療プロジェクトの成果が十分に出るよりも前に書き上げられたと考えて間違いない。たしかにこの年の何月かに、ジェンドリンはウィスコンシン大学精神医学研究所のリサーチ・ディレクターに就任してはいる(ジェンドリン, 1993)。だが、就任が何月であったにせよ、統合失調症治療の成果が6月の博士論文に反映されたとはおよそ考えられない。

その後、博士論文は改訂・改題の上、出版された。この出版されたものこそ、『体験過程と意味の創造：主観性への哲学的・心理学的アプローチ』

²ロジャーズがシカゴ大学に在籍していたころ、彼のもとには優秀な教え子が数多く集まっていた。中にはジェンドリン同様、優れた博士論文を書いてロジャーズの心理療法理論に逆影響を与えた人たちもいた。だが、彼らが博士論文を提出した先は、心理学部・教育学部・人間発達コミッティーのいずれかであって、哲学部ではなかった。

(Gendlin, 1962) である。第一次シカゴ時代の業績のご多分にもれず、出版されたのはウイスコンシン時代のことであった。

2.6.2 用語の対応関係の整理

博士論文において頻繁に登場する用語について対応関係を整理しておきたい。博士論文以降、ジェンドリンは今までの論文には見られない用語を数多く使い出すからである。用語の対応関係がはっきりすれば、表面上の用語の違いにとらわれず、博士論文全体の底に一貫して流れているものに目を向けられるようになるはずである。

「感じられた意味」の同義語・類義語 博士論文では、「感じられた意味 (felt meaning)」という用語が初めて登場する。厳密な意味合いを持って、頻繁に使われている。

「感じられた意味」という用語は、'57年論文までは単に「感情」と呼んでいたものを、より厳密な意味合いを持たせて呼んだものである。感じられた意味とは、弘中(1995)の言葉を借りれば、感情は感情でも「纏まりを持ち、方向付けがなされたもの」だといえるだろう (p.63)。

「感じられた意味」の同義語としては、「体験された意味 (experienced meaning)」「体験 (experience)」「フェルトセンス (felt sense)³」などがある。他には、必ずしも同義語とはいえないが、「体験過程 (experiencing)」が言い換え可能な用語として使われることがある。

象徴 「象徴」という用語に対して、ジェンドリンは非常に幅広い意味合いを持たせて使う。象徴とは、上記の「感じられた意味」や「体験過程」などとはたらき合うものすべてのことである。たとえば、「かったるい」や「荷が重い」といった言葉、箱庭の中にある蛙やゴジラなどのミニチュア玩具、目を閉じたら思い浮かんだマリモのイメージ、ドアを開けてぱっと入り込んだ部屋の中、これらすべてを象徴と呼ぶことができる。

³「フェルトセンス」という用語は、使われる頻度に関して言えば、現在のフォーカシング用語のなかでトップレベルに位置する。だが、当時は控えめに使われていたに過ぎず、ほかの同義語・類義語の方がより頻繁に使われていた。またこの用語は、意味合いに関して言えば、現在では、主に胸やおなかのあたりに生じる身体感覚のことを指すというのが共通の了解事項になっている。だが意外にも、当時はこの用語を身体感覚に結びつけた言及は少ない。身体感覚に明確に結びつけて言及されるのは、ウイスコンシン時代になってからのことである。

また、「象徴」という用語に対して、ジェンドリンは非常に創造的な意味合いを含ませて使っている。学者によっては、“象徴”という用語は、「鳩は平和の象徴」といったように、予め指す対象が決まっているものに対してのみ使うことがある。だがジェンドリンは、予め指す対象が決まっていなようなものに対しても使う。中でも、指し示すこと自体が対象に変化を引き起こすようなものに対して頻繁に、より重点を置いて使う。

このように、ジェンドリンの言う“symbol”は、いわゆる日本語の「象徴」という言葉よりも広い意味合いを持って使われている。よって、本稿では「象徴」と訳しているものの、上記のような含みを持ってジェンドリンが“symbol”という用語を使っていることはご承知いただきたい。

はたらき、はたらく (function) 「はたらき (function)」という名詞は、「役割 (role)」という言葉とほぼ同じ意味だと考えてよい (Gendlin, 1958, p.70)。たとえば、「肝臓にはアルコールを解毒するはたらき (役割) がある」といった使い方は、ジェンドリンの言う“function”の意味合いを捉える上で参考になるだろう。

またこの用語は、動詞としても頻繁に使われている。

ジェンドリン用語とディルタイ用語との対応関係 以上、ジェンドリンの各用語を解説した。こうした解説を踏まえた上で、以下に、ディルタイの用語法とジェンドリンの用語法との対応関係を筆者なりに示す。これにより、以下の解説で両者の著作から引用が登場する際に大まかな理解の手引きとしていただきたい。

ディルタイ	ジェンドリン
体験 (Erleben)、生 (Leben)	体験過程 (experiencing)
体験 (Erlebnis)	感じられた意味とその同義語
(産物としての) 表現	象徴
表現 (行為)	象徴化
体験を表現する	感じられた意味を象徴化する

2.6.3 この論文の特徴

博士論文にはディルタイ哲学からの影響が色濃く現われていると筆者は考える。だが、意外にもこの論文の中でディルタイが言及されているのは

一度だけであり、他の哲学者・思想家が質量ともかなり言及されているのに比べると、意外なほどの少なさである。

そこでこの節では、筆者なりに補助線を引きつつ、ディルタイからジェンドリンへの多彩な影響関係を5つの項目に分けて解説したい。

experiencing(Erleben) と a unit experience(Erlebnis) との区別
ジェンドリンは修士論文において、ディルタイの著作で「体験」を意味する用語のうち、Erlebenの方を experiencing と英訳し、Erlebnisの方を a unit experience と英訳していた(田中, 2004, pp.69-70)。

experiencing(体験過程) と a unit experience(単位となった体験) との区別は、引き続き博士論文でもおこなっている。

体験過程を一つの体験として特定したり、選び出したり、創造したりしたときに限って、一つの体験がある、といえる。このように特定しなければ、体験過程はいつでも多様である。体験過程は多様で、数えられない(multiple, non-numerical)。一つの体験とは、象徴作用によって生み出された産物なのである。一方、体験過程(experiencing)とは、2つとか5つとか100万とかいった単位からなるものではない。元々単位などはないのだ。単位となった体験(a unit experience)とは、どれも、いつでも結果として生じた産物なのである。(Gendlin, 1958, p.131)

かいつまんで言うと、experiencing とは数える以前の何かであり、a unit experience とはすでに数えられるようになったものだといえる。

全く過ぎ去った体験と現在に影響を与えている体験との様式の違い 博士論文においてジェンドリンは、「現在」に関する、あい矛盾すると思われる主張二つの間に接点を見出し、説明しようとする。

「現在」に関する第一の主張は、ロジャーズによる肯定的な主張である。ロジャーズは、人間は過去に縛られているわけではないという人間観を持ち、治療においては「現在」を重視することを主張してきた。

「現在」に関する第二の主張は、ジェンドリンらによる一見否定的な主張である。ジェンドリンらが'56年におこなった実証研究には、「クライエントは過去の出来事を話したか / 現在の出来事を話したか」という変数があり、この変数と治療の成功とは相関関係がないことが実証された(田中, 2004, p.76)。

果たして、治療において現在は重要なのか、重要ではないのか。ジェンドリンはこの問題を、現在の体験過程 (experiencing) を現在の体験 (experience) から区別することによって整理し、説明する。

ふさわしい用語に恵まれなかったがために、現在の体験 (experience)こそ大切なのだというロジャーズの見解はあちこちで誤解されてきた。クライアントは過去の体験に取り組む必要などないのだという意味にとられてきたのである。ロジャーズの見解をそのようにとると、ロジャーズの言う現在とは、概念的な内容のことを指すのだということになってしまう。ロジャーズは誤解され、クライアントは現在の生活の内容だけに取り組めばよいのであって幼い頃の体験に取り組む必要などない、と言いたかったかのように受け取られてしまっている。だが、ロジャーズが言いたかったのは、取り組む概念的な内容が過去のものであろうと、現在のものであろうと、クライアントは現在の体験過程 (experiencing) を通してだけ、うまい具合に問題に取り組むことができる、ということなのである。(Gendlin, 1958, p.235)

同じような考え方が、ディルタイの著作の中にも見受けられる。体験の内容が過去のものであろうと、現在のうちにあるものとしてだけ、私たちにとってそこにあるという考え方である。

ひとくちに体験を思い出すといっても、体験が、現在において生き生きと影響を与えている場合と、全く過ぎ去っている場合とでは、様式 (Art / manner) の点でははっきりと違いがある。体験が現在に影響を与えている場合には、感情そのものが再び現われる。だが、体験が過ぎ去っている場合には、ただ感情について思い浮かべたものがあるだけである。思い浮かべたものから、さらに感情が生じることがあるとしても、それは現在に基づいてのみありえることなのだ。(Dilthey, 1927, p.231)

体験が過ぎ去ったとしても、過去の体験は、現在の体験のうちにあるものとしてのみ、私たちにとってそこにあるといえる。(Dilthey, 1927, p.230)

体験の内容は刻一刻と変わるとしても、実在によって満たされた現在は常に存在し続ける。(Dilthey, 1927, p.193)

なお、ここでいう「私たちにとってそこにある」や「実在によって満たされた」とは、外界に物があるという意味ではない。熱病患者の例を思い出しただきたい(田中, 2004, p.65)。物ではなく、内的な体験が実在的 (real) だとディルタイは述べているのである。

このように、基本的な考え方に関しては、たしかにディルタイを引き継いでいるといえる⁴。ディルタイは、体験の内容はいろいろ変わっても、現在、私たちにあってそこにあるものが大切なのだという。この「私たちにあってそこにある」ものこそ、ジェンドリンのいう体験過程 (experiencing) なのである (田中, 2004, p.65)。

最後に、現在の心理療法の解説書では、この「現在」の問題をどう扱っているのかを見てみたい。あるフォーカシングの教示書の中で以下のように述べられている。

相手がフェルトセンスを過去形で話すようになったとき...は、ただ「今もそんなふうな感じですか」と質問してください。そうすれば、現在のからだに帰ることができます。(「はい」という答えになるかもしれませんが、「いいえ、今の感じは...」となるかもしれません。)(ワイザー・コーネル, 1996b, p.113)

ここで注意していただきたいのは、彼女は、相手が過去の話題を出したら話をやめさせよ、などとは言っていないことである。相手が過去の体験を思い出すことを否定しているわけではない。相手が過去形で話してしまっていることに対して介入を勧めているのである。ディルタイ風に言えば、過去形で話してしまっている状態は「体験が全く過ぎ去っている場合」に当たり、「ただ、感情について思い浮かべたものがあるだけ」の様式なのである。一方、「思い浮かべたものから、さらに感情が生じることがあるとしても、それは現在に基づいてのみありえる」ことである。だからこそ、「今もそんな感じですか」と介入し、「現在の体験過程を通して」相手が語れるように聞き手は促すべきだと彼女は言っているのである。

体験を適切に言い表すことと、体験を越え出てゆくこととの二重の関係 ジェンドリンは、体験の進み方の奇妙な性格に注目する。表現が「誠実」で、漠然と思っていたことをびたりと言い当てたときに限って体験に変化が起こることは、以前少し触れた (本論文, p.3)。これは言い換えると、「同じだ」と思えたときに限って「同じではない」状態になるということである。このことを、ジェンドリンは博士論文でこう述べている。

⁴ただし、ディルタイとジェンドリンとは、用語の使い方は同じではない。現に、上の文章において、ジェンドリンなら experiencing(Erleben) というところで、ディルタイは Erlebnis と言っている。

ある意味では、出てきた象徴は元の感じられた意味を象徴化するといえる。だが、ある意味では、象徴は感じられた意味を特定し、補い、乗り越える... 要するに変えてしまうのだといえる。興味深いのは、まさにこの二重の意味である。つまり、象徴は元の感じられた意味をある程度的確に象徴化するのだが、同時に、象徴は元の感じられた意味をある程度変えてしまうのである。(Gendlin, 1958, pp.96-7)

この、二重性を見るところに、筆者はディルタイ的な考え方の影響を見る。ディルタイはこう述べている。

体験を捉えようと前に進むことによって、体験のうちに含まれていたものが、より適切で、より確実で、より根本的な表現となって現われる。ここには、体験を適切に言い表すことと、同時に、体験を捉えることによって越え出てゆくこととの二重の関係が生じているのだ。(Dilthey, 1927, p.30)

満足と不満足の繰り返しで内容を乗り越えて進むこと ディルタイは、表現の適切さの基準を「満足感」だと述べたことは、'57年論文の解説のところで多少触れた(本論文, p.4)。表現したあとの「満足感」は、ジェンドリンも表現の適切さの基準と見ている。

感情に名前が見つかる、ひとは極度の緊張がゆるんだときのように、ほっとするものである。(Gendlin, 1958, p.50)

ほっとするかどうかで、名前が適切だったかどうかかわかると述べているのだ⁵。と同時に、体験が進むと元の表現がふさわしくなくなるとも言っている。

しばしば見受けられることだが、クライアントが体験過程に注意を向けつつ語っていくうちに、さらに体験過程が生じてきて、いったん言葉にしたものが不十分になってしまうのである。(Gendlin, 1958, p.220)

実は、これと似たようなことをディルタイも述べている。

心的な脈絡を目指して体験を補ってゆくはたらきは、体験をその都度捉えた内容を乗り越えて進んでゆく法則に基づいている。このようにして... 一步一步進むたびに満足がともなう。だが、体験はつかみ尽くせるものではないので、結局は満足するあとから不満足が生じることになるのだ。(Dilthey, 1927, p.29)

⁵近田(2002)の卓抜な言い回しを借りるなら、「言いたいことが言えたから胸のつかえがとれたのではなく、胸のつかえが取れたことによって、それが言いたいことだったとわかる」(p.59)ということになるだろう。

過去の制約を受けながらも、さまざまな可能性を内に含むこと 博士論文に至るまでの間、ジェンドリンはフィードラーの研究結果をみずからの課題とし、そこから新たな仮説を立てて実証してきた。そして、実証した結果を博士論文において精緻に理論化したのである。

ジェンドリンが博士論文において理論化した内容は、「体験された意味は、論理的関係によっては規定を受けないが、かといって、勝手気ままにはたらいっているわけでもない」という主張に集約される。この主張もまた、ディルタイ哲学に源を求めることができる。ディルタイが著作の中で述べた内容は、「(体験は)過去の制約を受けながらも、さまざまな可能性を内に含む」という主張に集約される。

以下では、フィードラーの研究結果から、ジェンドリンの主張とディルタイの主張との対応関係までのつながりを筆者なりに補助線を引きながら論ずることにしたい。

フィードラーの研究結果の選択的な受容 フィードラーの研究結果のうち、「治療の成功は、セラピストの学派の違いとは相関関係がなかった」という否定的な結果については、ジェンドリンは自分の問題として引き継いだ。だが、「治療の成功は、熟練したセラピスト側のかもし出す治療関係にあった」という肯定的な結果については棚上げした。

ジェンドリンは、治療が成功するための「クライアント側の」条件に注目し、変数として取ったのである⁶。これは、フィードラーが変数として取ったのがあくまでセラピスト側の変数だけであったのと対照的である (Fiedler, 1950, pp.438-9)。

'56年の実証研究を振り返る 実は、博士論文の時点から振り返ってみると、'56年のジェンドリンらによる実証研究における変数の取り方は、心理療法の学派に関わらず、クライアントの内側で共通して起こっていることを解明するための布石だったといえる。

'56年の実証研究において、治療の成功と相関がなかった項目は、「治療関係をとりのけ話題にしたか」、「セラピストのことをとりのけ話題にしたか」、「過去の出来事をとりのけ話題にしたか / 現在の出来事をとりのけ

⁶ 「クライアント側の」発言を評定し、治療の成功との相関を調べるという点に関しては、ジェンドリンは Seeman(1954) の実証研究を引き継いでいるといえよう。

け話題にしたか」であった(田中, 2004, p.76)。このことを念頭において、博士論文における以下の論述を見ていただきたい。

どんな種類の話の内容が心理療法で成果を挙げるのにうってつけなのかということが、近頃の関心事となっている。クライアントはもっぱら、幼い頃のトラウマを取り上げるべきなのか、それとも、今起こっている問題を取り上げるべきなのか？ 親とのいさかひのことが、セラピストとの間柄のことが、あるいは権力を求める野心のことが、それとも性的な葛藤のことを取り上げるべきなのか？ ...とりあえずわかっていることは、心理療法の学派が違えば、どんな話の内容が心理療法にうってつけだと考えるか、その重点の置き方が違うということである。(Gendlin, 1958, p.8)

つまり、'56年の研究における、クライアントの話の「内容」に関する変数とは、セラピストがよって立つ学派によって違ってくる予想される変数だったのである。こうした変数をとることによって、学派の違いは治療の成功と相関がないということをし、「クライアント側の条件として」証明するのがこの実証研究の一つのねらいだったのである。

一方、'56年の実証研究において、治療の成功と相関があった項目は、「感情をじかに表現したか」「治療関係から新しく重要な体験が生じたか」などであった(田中, 2004, p.76)。このことを念頭において、以下の博士論文におけるジェンドリンの論述を見ていただきたい。

どんな学派の心理療法においても、まだよくわかってはいないけれども、「同じ」過程が起こっているのではないか...。どうしたらこの「同じ」過程に言及することができるのだろうか。(Gendlin, 1958, p.8)

つまり、'56年の研究における、クライアントの話の内容「以外」に関する変数は、「どんな学派でも起こっている同じ過程」を見極めるための変数だったのである。そして、この肯定的な結果は、つづめて言えば、表現を、表現内容だけではなく、体験(過程)との関係から捉えるということの意味していたのである。

このような発想の転換の仕方に、筆者はディルタイ的な考え方の影響をかいま見る。ディルタイ風に言えば、次のようになるだろう。クライアントの生の現われは、「(狭義の)概念や判断」ではなく、「体験の表現」としての性質をもつとジェンドリンは仮説を立て、そして実証された。ならば、「体験の表現」を理解するには、表現内容だけでなく、表現の出どこ

るにさかのぼる必要があることになる。この出どころが、クライアントの「体験過程 (experiencing)」なのである。

体験過程に対しては、「(狭義の)概念」の秩序を押し着せることはできない。体験過程は、概念的ではなく、あくまで「前概念的 (preconceptual)」なのだと言っているジェンドリンはいう。

万一、前概念的なものの中に概念的なものを持ち込んでしまったらどうであろう。...おのずと、用語が違えば体験も違うのだ、と言わざるを得ないことになってしまう。だが実際にはそんなことはないのだ！...同じ一つの体験を、二つの用語どちらによっても特定することができるのである。(Gendlin, 1958, p.200)

万一、体験過程が(狭義の)概念と同じ秩序を持っているだけならば、単一の学派の理論体系によってしかクライアントにアプローチすることができないことになってしまう。なぜなら、理論体系とは、(狭義の)概念どうしを結び合わせることによって成り立っているものだからである。だが実際にはそんなことはないことは、上記の実証研究の結果が証明している。よって立つ学派の理論体系が異なっても、さまざまなセラピストがクライアントにアプローチし、表現を促すことができるのだ。このように、さまざまな促しに応じてさまざまな表現で応答することができるのが、クライアントの体験過程なのである。

同じことでもいろいろな表現の仕方がある 近年、ジェンドリンはインタビューでこう応えている。

私はドイツの哲学者ウィルヘルム・ディルタイ (Dilthey, W., 1833-1911) をずっと研究していました。同じことでもいろいろな表現の仕方があることも自分ではわかっていました。(ジェンドリンら, 2002, p.208)

たしかにジェンドリンは「同じことでもいろいろな表現の仕方があること」を、ディルタイから読み取ったようである。そこで、ディルタイの著作にさかのぼることにより、ジェンドリンの発想の源を探ることにしよう。ディルタイは、「広い意味では、音楽も体験の表現といえる」(Dilthey, 1927, p.221) と言い、しばしば体験の進み方を作曲活動になぞらえている。ディルタイによるそうした音楽の比喻の中からまず一つ挙げてみよう。

いたるところに自由な可能性がある。…ある時点において、続く音が違った音になってはいけな、などと考えるべきではないのである。(Dilthey, 1927, p.221)

同じようなことを、ジェンドリンは博士論文において、自分なりの言葉で述べている。

感じられた意味は、さまざまなかたちに、それでいて同じように正確に象徴化することができるのである。(Gendlin, 1958, pp.121-2)

ディルタイやジェンドリンが述べていることを、心理療法における体験の表現の例に当てはめて考えてみよう。東山(1994)は、箱庭療法において、同じ場所にさまざまなミニチュア玩具がぴったりと収まる例を挙げている。

橋が見つからない、ぴったりした橋がないと、橋を探し回っているクライアントの箱庭を見たとき、セラピストは橋の形をしたどのような橋をもってきても、クライアントの川には橋がかからないような感じを受けた。セラピストは2匹の大蛇を持ってきて、それを折り曲げて、首と尻尾を両岸に埋め込み、橋とした。クライアントは、私の川にかかっているのはまさにこんな橋です、と大粒の涙を流した。(pp.32-3)

「同じことでもいろいろな表現の仕方があること」を示した例である。最初の時点において、クライアントがとりあえず適切だと思った表現の素材は「橋の玩具」である。だが、クライアントが橋が見つからないと言った時点において、橋とは違った素材の玩具になってはいけな、などと考えるべきではないのである。

このように、同じ体験に対して等しい表現がいくつかある場合、そうした表現どうしは「はたらき方の点で等しい(functionally equivalent)」のだとジェンドリンはいう(Gendlin, 1958, p.141, 149, 201)。この用語法を上例に当てはめると、「橋の玩具」と「2匹の大蛇」とははたらき方の点で等しいのだということになるだろう。他にも東山(1994)は、箱庭療法において、異なる象徴が同じ体験に対してはたらき方の点で等しい例を挙げている。たとえば、あるとき「横向きの蛙」の玩具が見つからないとクライアントが言ったので、蛙を置こうとしていた場所にセラピストが「尻尾のちぎれた鯉」「壊れた電話機」「ブルドッグ」などを置いてみた。する

と、不思議なことに蛙の代わりになったり、あるいは蛙以上にぴったり収まったりすることがあったのだという (p.32)。一見したところ、何の関係もないようなミニチュア玩具どうしが、ある時点でのクライアントの体験に対しては、はたらき方の点で等しかったのである。

体験の性格①：さまざまな可能性を内に含むこと ではなぜ、同じことでもいろいろな表現の仕方がありえるのか。ディルタイは、そもそも、いろいろな表現の出どころである体験というものが、独特な性格を持っているからだという。

「体験」のもつ独特な性格について、ディルタイが作曲活動の比喻によって別の箇所述べている。

器楽はある種の表現である。...そこにあるのは、ある方向、実現しようと進んでいく行為、心的活動そのものの進展、過去の制約を受けながらもさまざまな可能性を内に含むこと、同時に創造でもあるような展開 (Explication) である。(Dilthey, 1927, pp.231-2)

ここではいろいろなことが述べられているが、まず、「(体験が) さまざまな可能性を内に含む」と述べられていることに注目したい。ディルタイと同じようなことをジェンドリンはこう述べている。

感じられた意味が多様だからこそ、プロセスや動きが生じる。感じられた意味を展開 (explicate) する前には、非常に多くのまだ特定されていない意味が感じられた意味「の中に」あるといえる。(Gendlin, 1958, p.142)

体験の性格②：過去の制約を受けること だが、ディルタイが体験の特徴として、同時に「過去の制約を受ける」と述べていることにも注目しなければならない。体験から表現への道筋は何でもよいわけではないのである。

「過去の制約を受けること」と「さまざまな可能性を内に含むこと」とは、一見ただけでは両立しがたいように見受けられる。果たしてどう折り合いがつくのかを、以下、いくつかの節にまたがりながら解説していきたい。

必然性による制約との違い 「制約を受ける」ということの意味合いについて、ディルタイはまたも作曲活動になぞらえながら語っている。

いたるところに自由な可能性がある。制約を受けるとはいつでも、この場合、必然性などというものはどこにも見当たらない。(Dilthey, 1927, p.221)

この文脈でディルタイが見当たらないと言う「必然性」とは、予め決まっていて他にはあり得ないような進み方、すなわち論理的な規範にかなった推論のことである。

論理的な規範にかなっているのは、「生の現われ」の中でも「(狭義の)概念や判断」の方であって、「体験の表現」ではないことは既に触れた(田中, 2004, p.67)。そこで、論理的な規範にかなった推論の典型例を見てみよう。

すべての人間は死ぬ
織田信長は人間だ
織田信長は死ぬ

この「(ゆえに)」こそが、必然性である。「すべての人間は死ぬ」と「織田信長は人間だ」という前提からは、「織田信長は死ぬ」というたった一通りの結論しか導き出せない。上記のどの文においても「死ぬもの > 人間 > 織田信長」という関係が成り立っているが、こうした大中小の関係にあれば、どんな3組でも代入可能であり、前提から結論を「形式的に」導き出すことができるのである。

結論を「形式的に」導き出すためには、「人間」や「織田信長」といった言葉の意味が、「思考の脈絡のどこに現われるか」、「どのように現われたか、いつ、誰が述べたか」に関わらず同じである(田中, 2004, p.67)ことが条件となる。同じでない、一通りの結論を導き出せないことになってしまう。意味を同じにするには、生の現われを「出どころの体験から切り離す」必要があるのだ(田中, 2004, p.67)。

以上のような制約が、論理的な必然性による制約である。だがこうした制約は、ディルタイの言う「制約」とは違ったものなのである。

なお、ディルタイの言うように、出どころの体験から切り離された「(狭義の)概念」のことを、ジェンドリンは「一義的に特定された (uniquely specified) 概念」あるいは「論理的な概念」と呼んでいる (Gendlin, 1958,

p.121-2)。

新しいものは前提から形式的に生ずるのではない ただしディルタイは、「概念」はどんなときでも出どころの体験から切り離されている、などとは言っていない。広い意味での概念は、「体験の表現」としての特徴を持つこともあるのだ。現にディルタイは、「一般概念は、生を理解するための表現として役立つ」(Dilthey, 1927, p.234) と述べている。ただし、「この場合、前提と続くものとの間には、進み方において自由な関係があるに過ぎない。新しいものは前提から形式的に生ずるのではない」(Dilthey, 1927, p.234) のだという。

ディルタイは同じようなことを作曲活動になぞらえてこう述べている。(なお、この文脈においては、「前提」が「音楽史」に当たる。)

たとえどんな音楽史をもってしても、どうやって体験が音楽になるのか、その仕方について述べることはできない。音楽における最高のちからは、心の中において、あいまいで、はっきりせず、ときには知らないうちに進んでしまっているような何かが、ふと音楽的な形をとって、結晶のようにくっきりとした表現を見出すことであろう。...体験から音楽へと向かうのに、決まった道筋などないのだ。(Dilthey, 1927, p.222)

体験は概念の積み上げでも満たせない またディルタイは、「一通りの決められた方向に概念を積み上げていけば、体験の中身すべてを満たすことができるなどと考えるのは錯覚だ」とも述べている (Dilthey, 1927, p.32)。

「一通りの決められた方向に概念を積み上げる」とは、体験から切り離して、ただ(狭義の)概念どうしを結び付けていくことである。(狭義の)概念どうしの結び付きとは、ジェンドリンの言葉で言えば、「論理的関係」ということになる。

一義的に象徴化された概念にたいして「論理的」という用語を用いることにしている。「論理的関係」というのは、全く一義的に特定された概念と概念とだけをもって成り立つ関係のことである。(Gendlin, 1958, p.118)

そしてジェンドリンは、次のように主張する。

体験された意味は、論理的関係によっては規定を受けない (is not determined by logical relationships)...(Gendlin, 1958, p.117)

このような言い方によって、ジェンドリンは、「(体験は)さまざまな可能性を内に含む」とディルタイが述べたことを受け継いでいるのである。

美的価値の実現 では、いわゆる論理的な必然性とは違った意味で「制約を受ける」とはどういうことなのか。再びディルタイの音楽による比喩を見てみよう。

流れの中でこの音でならなければならないというのは、必然性からではなくて、むしろ美的価値が実現しているかどうかなのである。(Dilthey, 1927, p.221)

美的価値の実現とは、心地よく響くかどうかという感性レベルでの制約を受けるということである。

よって、体験が「さまざまな可能性を内に含む」とは言っても、全く勝手気ままに表現を選べるわけではないのである。¹⁵⁷年論文の解説のところで挙げた弘中(1996)の例では、平和な牧場シーンではなく、ゴジラでなければ「気持が納まらなかった」(本論文, p.5)。一見逆説的だが、この例では、牧場よりもむしろゴジラの方が、美的価値が実現しているのだと言えよう。

では、ある表現によって美的価値が実現しているかどうかの確かめ先はどこにあるのか。ディルタイに言わせれば、表現の出どころの体験となり、ジェンドリンに言わせれば、象徴化に先立つ「体験された意味」ということになる。ディルタイ同様、ジェンドリンは、「創造」には先立つものの制約を受ける側面があるのだという。

「創造」という用語は、無からの創造を意味しているわけではない。あくまで体験された意味がはたらいている創造である。また、勝手気ままに全く規定を受けない創造や、何でもありの創造を意味しているのでもない。(Gendlin, 1958, p.122)

そしてジェンドリンは、次のように主張する。

体験された意味は...勝手気ままにはたらいているわけではない (does not function arbitrarily). (Gendlin, 1958, p.117)

このような言い方によって、ジェンドリンは、「(体験は)過去の制約を受ける」とディルタイが述べたことを受け継いでいるのである。

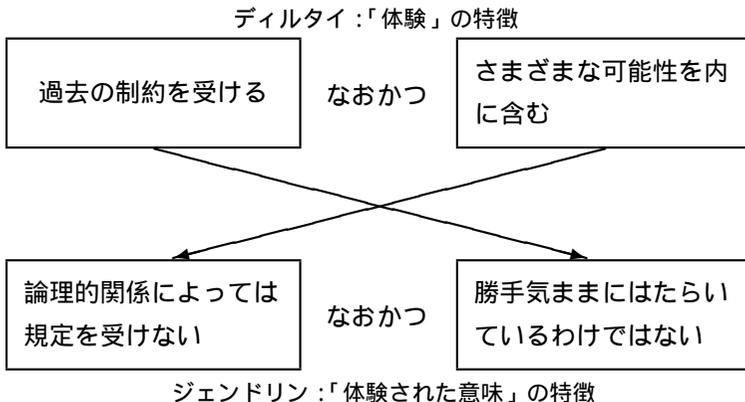
体験の二つの性格が両立すること ジェンドリンは博士論文の中で、同じクライアントの表現でも、異なる学派のカウンセラー（セラピスト）によって、表現の出どころの体験をどう見立てて応答するかが、三者三様であるという例を挙げている。そして、続けてこう言う。

こうした三種類のカウンセラーの誰でも、クライアントがどんな感情を象徴化するにあたっても手助けすることができるのだ。手助けする言葉はおのおのかなり違っているかもしれないが、カウンセラーは自分自身の言い方で何かを言うことができる。これに対してクライアントは、ほっとして「本当にそのとおりです」と言うことであろう。だからといって、どんな言葉かけでも間違いはないなどというつもりはない。間違いはないどころか、正確で的確な象徴化以外は、すべて間違いである。だが、全く正確な象徴化がいろいろとあり得る (many possible) のだ ! (Gendlin, 1958, p.98)

上に挙げた例で述べられていることをひとまとめにして言い表すと、以下のフレーズになるのである。

体験された意味は、論理的关系によっては規定を受けないが、かといって、勝手気ままにはたらいっているわけではない。(Gendlin, 1958, p.117)

ディルタイとジェンドリンとの対応関係の整理 ここまで筆者が解説してきたように、ジェンドリンが体験された意味の特徴として述べたことは、ディルタイの哲学に源を求めることができる。両者の主張を図にすると、以下のように対応すると筆者は考える。



このように、順序をくりりと変えると両者の主張はぴたりと対応するのである。

2.6.4 のちの著作との関係

博士論文で述べたことに、ジェンドリンは今でも自信を持っている。博士論文の内容は、「今の時代にこそ、よりふさわしいものである」と、近年彼は当時を振り返りながら述べているほどである (Gendlin, 1997a, p.xi)。

博士論文で理論化されたことは、ジェンドリンが思索を重ねていく上で実際に土壌となり、その後豊かな実を結んでいった。以下では、博士論文の中から、ディルタイ哲学の影響が強い部分を一点だけに絞り込んで、のちの著作との関係を見ることにしたい。

理論の精緻化：体験過程のあい矛盾する側面 ジェンドリンは、体験の流れというものを観察することにより、この流れはあい矛盾する性質を同時に併せもったものであることに注目した。

たとえば、体験過程は、時間の流れの中で「同じ」でありながら、かつ「同じでない」(本論文, p.12)。つまり、体験過程は連続的な側面と非連続的な側面とを併せもつといえる⁷。また、体験された意味は、「勝手気ままにはたらいっているわけではない」が、かといって、「論理的关系によって規定を受けるわけでもない」。つまり、体験された意味のはたらき方には、それなりの精密な「秩序」があるのだが、そのはたらき方は一義的に特定された概念(本論文, p.19)によって予めたつた一通りに決めておけるものではないといえる⁸。

⁷上嶋(1992)は、従来日本でおこなわれてきた体験過程理論の研究について、「パーソナリティの『変化』に関する Gendlin の理論的貢献に着目したものであり...パーソナリティの『同一性・一貫性』に関する彼の貢献に着目しようとするものは少ない」(p.109)と指摘している。しかし、ジェンドリンの体験過程理論は、「思いもよらない、全く新しい自分に代わっていくこと、なおかつそこには自分としての一貫性・同一性が見出されるという、一見相反するこの二つの事柄を統一的に捉えることの重要性を強調する」(p.104)点に着目すべきだと氏は主張する。氏はこの主張を、ジェンドリンの第二次シカゴ時代の業績、Gendlin, 1967; Gendlin, 1973; Gendlin, 1984 に基づいて論じている。

⁸諸富(2000)は、ジェンドリンの発想の中でも「ある面で規定されておりながら、しかし同時に完全に規定されておらず、さまざまな可能性へと開かれたままである」(p.47)という点に着目している。そして、ジェンドリンのこの発想は「単に言語表現に関してだけでなく、あらゆる人間事象に適用されている」(p.47)と主張する。氏はこの主張を、ジェンドリンの第二次シカゴ時代の業績、Gendlin, 1965; Gendlin, 1973 に基づいて論じている。

このようなあい矛盾する二つの側面については、既にディルタイが「決まっているとともにも決まっていない (bestimmt-unbestimmt / determinate-indeterminate)」という簡潔な言葉で言い表している。

目の前に言葉がずらりと一続きに並んでいる。これらの言葉それぞれを取り上げてみよう。すると、それぞれの意味は決まっているとともにも決まっていないといえる。どの言葉の意味にも振り幅というものがあるのだ。また、こうした言葉どうしの組み合わせ方にしても、限度というものがあるともいえるし、はっきりとしてはいないともいえる。意味の決まり切っていない言葉が、一つの文の中に収まることによって意味が決まる。すると同時に、文全体の意味というものが浮かび上がってくるのである。(Dilthey, 1927, p.220)

「決まっているとともにも決まっていない」ということを、心理療法の例に引き寄せて考えてみよう。弘中(1996)の箱庭療法の例は、「決まっているとともにも決まっていない」という性格を、言語的表現だけでなく、非言語的表現もまた持っていることを如実に示している。

象徴的表現を文脈の中で理解するための具体的な扱い方として...一連の表現のシリーズとの関連でひとつひとつの表現を理解する...ことがある。...たとえば魚も何も棲んでいない小さな池が箱庭に表現されたとしても、それ以前に不毛の砂漠のシーンが繰り返し表現されていた時には、たとえ小さな池であっても『やっと水がでてきた!』と感動的に受け止めることができる場合である。(p.21)

象徴的表現は本来多義的なものである。...まるで反対の意味を含んでいることすらある。たとえば、箱庭の中に登場する柵は自分を安全に守ってくれるポジティブなものかもしれないし、自分を閉じ込めてしまうネガティブなものかもしれない。(p.21)

「小さな池」「柵」などの象徴には、元々ある程度意味があるものの、完全に意味が決まっていなかった。箱庭の中に置かれることによって、初めてはっきりした意味が決まるのである。

話をディルタイに戻そう。ディルタイは、言葉の意味だけではなく、同時に「生 (Leben / life)」そのものの意味もまた、「決まっているとともにも決まっていない」のだという。

言葉には何かを指す意味があり、文章には読み手が受け取る意味というものがあるように、生全体の脈絡というものも、その部分部分の決まっているとともにも決まっていない意味からわかってくるのである。(Dilthey, 1927, p.233)

生が「決まっているとともに決まっていない」ということによって、ディルタイによる「体験」の特徴づけや、ジェンドリンによる「体験された意味」の特徴づけを整理することができる。意味が「決まっている」ことの方が、「過去の制約を受ける」「勝手気ままにはたらいっていない」という閉じた側面に、より対応しているといえる。一方、意味が「決まっていない」ことの方が、「さまざまな可能性を内に含む」「論理的関係によって規定を受けない」という開かれた側面に、より対応しているのだといえる。

このようにして体験とは、独特の精密な秩序を保ちながらも、なおかつ、創造的に進んでいくのである。このような体験の進み方をディルタイは、「同時に創造でもあるような展開 (Explication)」と呼んでいた (本論文, p.18)。同じことを、ジェンドリンは博士論文において「把握 (comprehension)」という自分なりの言葉使いで述べている。

把握内容が元の体験された意味を象徴化している場合には、把握とは、同時に創造的であるほかはない。(Gendlin, 1958, p.101)

この「把握」という用語は、のちにそれほど使われなくなる。だが、その代わりに、体験のもつあい矛盾する性格を別の用語をもってジェンドリンは言い表すようになる。

あい矛盾する性格を言い表す別の用語のうち、一つは「展開 (explication)」である。これはもちろんディルタイが「展開 (Explication)」と言っていたものの英訳語である。“explication” という用語を、ジェンドリンはウィスコンシン時代や第二次シカゴ時代になってからますます「同時に創造的でもあるような」意味合いで使うようになる。

あい矛盾する性格を言い表す別の用語のうち、もう一つは「進展 (carrying forward)⁹」である。この用語がどのように使われているか、近年の著作の中から二例引いてみよう。

「進展」という用語が使われている一つ目の著作においては、心理療法の面接記録が具体的に提示されている。面接の中でクライアントに、ふとした気づきとからだのホッとする感じ(シフト)が訪れた。そのくだりに、ジェンドリンはこうコメントを加えている。

⁹ “carrying forward” は、従来の訳書 (ジェンドリン, 1966) では、「推進」と訳されていた。だが、近年では「進展」と訳されることも多くなっている。その改訳の意図には筆者も同意できるので、本稿でも「進展」の方を訳語として採用することにした。

今になって振り返ってみると、シフトがただ勝手気ままに起こっていたわけではなかったのだとわかる。あさっての方へツンといきなりシフトしたわけではなかったのだ。…むしろ、シフトが起こる前と起こった後ではプロセスが連続していることがわかる。問題の見え方は今までとがらりと違っているけれど、それでも取り組んでいるのは今でもなお「同じ問題」なのだということは自分でわかる。しかし、ここで言う「同じ」とは、何が問題なのか、その中身が全く同じということではない。どこか体験の流れが連続しているということなのである。…この種の連続性によって問題は「進展した」のである。…今になって初めて、そういえばこの新しい一歩は前々から起こっていたことの中にきざしがあったといえればあったよなあ、とわかるのである。だが、そのような一歩は前もって論理的に推論できるものではなかったのである。(Gendlin, 1996, p.71)

「進展」という用語が使われている二つ目の著作においては、人が科学的な探究を進めていく際にどのような秩序がはたらいっているかが述べられている。以下のくだりは、ジェンドリンが持論を、ウィトゲンシュタインという哲学者を引き合いに出しながら語っているところである。だが、そうした文脈においてさえも、土台となっている考え方はあくまでディルタイ哲学であるのが一目瞭然である。

言葉は、勝手気ままに使うことなどできないが、論理的なパターンによって縛られているわけでも制限されているわけでもない。…たしかに論理的なパターンは、人の生の内にも含まれてはいる。しかしこうしたパターンもいずれ進展するのであって、前提のようなはたらきをして生を制限してしまうわけではない。…それゆえ、どんな探究を進めていくにあたって、形式的な面から見れば開かれているといえる。つまり、さまざまな異なるかたちに進展させることができるのだ。(Gendlin, 1997b, pp.137-8)

このように、ジェンドリンが第一次シカゴ時代に着目した体験過程のあい矛盾する側面は、呼び名を変えながらものちのちまでジェンドリンが繰り返し注目し、考察し続けることになるのである。

おわりに：第一次シカゴ時代の業績の意義

ジェンドリンの第一次シカゴ時代は、現在の地点から見ると、学者としても実践家としてもいちばん未成熟な時代である。その未成熟な時代の業績に、今回あえて筆者は目を向け、解説をおこなった。ひととおり解説を

終えたところで、筆者がなぜあえてこの比較的未成熟な時代の業績を取り上げ、ディルタイ哲学からの影響という点から解説したか、その意義を述べながら本稿全体を総括したい。

まず、ディルタイと比較対照することにより、ジェンドリンの考え方をクリアにすることができる。ジェンドリンがなぜパーソナリティの静的内容ではなく、パーソナリティの「変化」というものに注目したかという点である。「変化」に注目することができたのは、そもそもジェンドリンが、ディルタイ哲学から「創造性」をテーマとして受け取ったことと大きく関わっている。そして、ディルタイの著作と比較対照することにより、ジェンドリンが「創造性」ということと言おうとしたのは、次の二点に整理することができるかと筆者は考える。

- a. 体験が予想外の方向へ進んでいくこと
- b. 体験を表現する仕方は、一つではなく、さまざまであること

a. の「予想外の方向へ進んでいくこと」については'57年論文の解説で論じた。b. の「表現の仕方はさまざまであること」については'58年の博士論文の解説で論じた。

次に、ディルタイと比較対照することにより、ジェンドリンの考え方のうちで文脈に埋もれてしまいがちな点を浮かび上がらせることができる。上に述べたように、たしかにジェンドリンは「変化」や「創造性」という、パーソナリティの動的な側面に対して考察をおこない、研究者の間で歓迎されてきた。ただし、ジェンドリンは、パーソナリティが過去と連続する側面に対しても考察をおこなっていることに関しては、今まで研究者の間で十分に受け取られてこなかった(上嶋, 1992)。だが、変化する = 非連続な側面と、同一的 = 連続的な側面という、一見あい矛盾する両側面を同時に見据え続けたことこそが、実はジェンドリンの考察の真骨頂なのである。この点に関してもディルタイ哲学から影響を受けていることを、筆者はとくに博士論文の「のちの著作との関係」のところで解説した。なお、蛇足ながら、体験過程が非連続な側面と連続的な側面とを併せもつというジェンドリンの主張を、筆者は日本風に次のように捉え、まとめてみたい。「体験過程は、“トンビが鷹を生む”という側面と“瓜のつるになすび

はならぬ”という側面とを同時に併せもつ。このどちらの側面も見落さないことが、現象をありのままに見ることになるのだ」と。

第三に、ディルタイと比較対照することにより、わかりにくい部分をわかりやすくすることができる。ジェンドリンが、ロジャーズ学派の理論が発展する上でいかなる貢献をしたかという点である。ジェンドリンが独自の概念や用語法を用いて、学派の違いに関わらず共通して起こっていることを解明した点だけに注目すると、ロジャーズの独創性を否定あるいは相対化してしまったかのように見える。しかし、ある意味ではロジャーズ学派の理論的發展に貢献したのである。彼は「体験過程」という概念や、「(狭義の)概念」と「体験の表現」との区別といった、ディルタイ哲学に由来する考え方を心理療法研究に適用した。実証研究に「体験過程の様式」という全く新たな座標軸を持ち込んだのである。これにより、今まで同学派内で「治療関係の重要性」や「現在の重要性」などと大雑把に言われてきたことが、本当に意味するところを探り当てることに成功したのである(田中, 2004, p.78; 本論文, pp.10-12)。こうした点において、むしろジェンドリンは、ロジャーズの言わんとすることをロジャーズ本人よりもよりよく理解しようとしたのだといえよう

以上のように、若き日のジェンドリンの体験過程理論を考察するに当たり、ディルタイ哲学と比較対照することによって、ジェンドリンの主張をよりクリアにすることができ、文脈に埋もれがちな側面を浮かび上がらせることができ、わかりにくい部分をわかりやすくすることができたと筆者は考えるのである。

謝辞： 本学文学部心理社会学科の弘中正美教授には、原稿全体をチェックしていただき、貴重なコメントをいただいた。フォーカシング・プロジェクトの笹田晃子先生からも貴重なコメントをいただいた。本学図書館レファレンス係の方々には、一次資料の入手にあたって大変お世話になった。ここにお礼を申し上げたい。また、私を体験過程理論に導いてくださった阿世賀浩一郎先生(明治学院大学)と末武康弘先生(法政大学)に感謝申し上げたい。

また、ベルギーの精神科医 Depestele 博士に多大なる感謝を申し上げます。筆者は、氏によるジェンドリン著作目録 (Depestele, 2002) がなければ、そもそも第一次シカゴ時代の一次文献を入手することはおろか、その存在を知ることさえもできなかった。

参考文献

- 近田輝行 (2002): フォーカシングで身につけるカウンセリングの基本: クライアント中心療法を本当に役立てるために コスモス・ライブラリー
- Depestele F(2002): *Primary bibliography of Eugene T. Gendlin*. Website. URL: <http://www.focusing.org/bibliography.html>(2005年1月現在)
- Dilthey W(1927): *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*. (Gesammelte Schriften. 7), B.G.Teubner. (Makkreel RA, Rodi F(Eds) *The formation of the historical world in the human sciences*. Princeton University Press, 2002)
- Fiedler F(1949): *A comparative investigation of early therapeutic relationships created by experts and nonexperts of the psychoanalytic, non-directive, and Adlerian schools*. Doctoral dissertation. Department of Psychology, University of Chicago.
- Fiedler F(1950): A comparison of therapeutic relationships in psychoanalytic, nondirective and Adlerian therapy. *Journal of consulting psychology*, 14, 436-445.
- Gendlin ET(1957): A process concept of relationship. *Counseling Center Discussion Papers*, 3(2).
- Gendlin ET(1958): *The function of experiencing in symbolization*. Doctoral dissertation. Department of Philosophy, University of Chicago.
- Gendlin ET(1962): *Experiencing and the creation of meaning: a philosophical and psychological approach to the subjective*. Free Press of Glencoe.
- Gendlin ET(1964): A theory of personality change. Worchel P, Byrne D(Eds) *Personality change*. John Wiley and Sons, pp 100-148.
- Gendlin ET(1965): What are the grounds of explication?: a basic problem in linguistic analysis and in phenomenology. *The Monist*, 49(1), 137-164.

- Gendlin ET(1973): Experiential phenomenology. Natanson M(Ed) *Phenomenology and the social sciences*. 1, Northwestern University Press, pp 281-319.
- Gendlin ET(1984): The client's client: the edge of awareness. Levant RL, Shlien JM(Eds) *Client-centered therapy and the person-centered approach: new directions in theory, research and practice*, Praeger, pp 76-107.
- Gendlin ET(1989): Phenomenology as non-logical steps. Kaelin EF, Schrag CO(Eds) *American phenomenology: origins and developments*. Kluwer. pp 404-410.
- Gendlin ET(1996): *Focusing-oriented psychotherapy: a manual of the experiential method*. Guilford.
- Gendlin ET(1997a): Preface to the paper edition. *Experiencing and the creation of meaning: a philosophical and psychological approach to the subjective*. Northwestern University Press, pp xi-xxiii
- Gendlin ET(1997b): The responsive order: a new empiricism. *Man and World*, 30(3), 383-411.
- ジェンドリン (1966): 村瀬孝雄 (訳) 体験過程と心理療法 牧書店
- ジェンドリン (1993): 略歴 筒井健雄 (訳) 体験過程と意味の創造 ぶっく東京 p 5
- ジェンドリン・伊藤義美 (2002): ジェンドリン, E. T. 博士が物語る 伊藤義美 (編) フォーカシングの実践と研究 ナカニシヤ出版 pp 197-216
- 東山紘久 (1994): 箱庭療法の世界 誠信書房
- 弘中正美 (1995): 表現することと心理的治癒 千葉大学教育学部研究紀要 1 教育科学編, 43, 55-65
- 弘中正美 (1996): 心理療法における象徴的表現について 千葉大学教育学部研究紀要 1 教育科学編, 44, 19-27
- 諸富祥彦 (2000): E. T. ジェンドリンの哲学 (その 2) : 言語表現の恣意性の問題と現象学的「解明」 千葉大学教育学部研究紀要 1 教育科学編, 48, 41-51
- Seeman J(1954): Counselor judgments of therapeutic process and outcome. Rogers CR, Dymond R(Eds) *Psychotherapy and personality change: co-ordinated research studies in the client-centered approach*. University of Chicago Press, pp 99-108.
- 田中秀男 (2004): ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究 (上) : 心理療法研究におけるデイルタイ哲学の影響 図書館の譜 : 明治大学図書館紀要, 8, 56-81

- 上嶋洋一 (1992):ジェンドリン, E. T. の「体験過程 (experiencing)」論：パーソナリティの「変化」と自己の「同一性」の問題 龍谷大学短期大学部 (編) 仏教と福祉の研究 pp 91-113
- ワイザー・コーネル (1996a): 大澤美枝子 (訳) フォーカシング入門マニュアル 金剛出版
- ワイザー・コーネル (1996b): 大澤美枝子・日笠摩子 (訳) フォーカシングガイド・マニュアル 金剛出版